

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：13302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03972

研究課題名(和文) エフェクチュエーションとE0から探索する在外日本人女性起業家の成功要因

研究課題名(英文) The entrepreneurial processes and success factors of Japanese female entrepreneurs in abroad

研究代表者

姜 理恵 (Rihyei, Kang)

北陸先端科学技術大学院大学・先端科学技術研究科・准教授

研究者番号：90570052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は在外日本人女性起業家を研究対象とし、「在外日本人女性起業家の起業プロセスと成功要因は何か」というリサーチ・クエスチョンを、「移民先と母国」との視点も交えながら定性調査によって探索するものである。本調査では起業家性向を測るE0理論と、エフェクチュエーションの理論を併用して作成した半構造化インタビューガイドにより在外日本人女性起業家をインタビュー調査し、MGTAにより分析した。結果、リスク性向の低さ・地域密着志向の強さと、エフェクチュエーションロジックの十分な発揮、ファミリービジネス化によって強固な経営基盤を築く在外日本人女性起業家の特徴を発見した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人女性起業率は世界ワースト2位だが成功率は高く、日本人女性の起業は「少産少死」型という特徴がある。低さは日本社会の支援の薄さや元々起業意欲が低いことによるが、高成功率の理由は不明である(高橋, 2015)。本研究により起業支援の厚い海外地域で日本人女性の起業家行動が活発であると判明、日本人女性の起業家活動低調は社会的要因によると示され、ファミリービジネス化、地域連携といった成功要因も示した。

研究成果の概要(英文)：This study focused on Japanese female entrepreneurs in abroad and explored the research question "What are the entrepreneurial processes and success factors of Japanese women entrepreneurs in abroad?" with the perspective of "immigrant destination and home country". This study developed a semi-structured interview guide using E0 theory and effectuation theory and analyzed interviews by M-GTA methodology.

The result showed the characteristics of Japanese female entrepreneurs in abroad were a low risk propensity, community-based orientation, effectuation logic, and family business orientation.

研究分野：経営学

キーワード：女性起業家 移民起業家 エフェクチュエーション ファミリービジネス

1. 研究開始当初の背景

本研究は在外日本人女性起業家を研究対象とし、「在外日本人女性起業家の起業プロセスと成功要因は何か」というリサーチ・クエスチョンを、「移民先と母国」との視点も交え、二種の定性調査を併用して探索する。

世界的起業家調査 GEM は 2013 年「移民起業家が母国・移民先双方の経済成長を支える」と発表し移民起業家への注意を喚起した。現在「移民」は最重要議題の一つである。日本では移民受入の議論は多いが、送り出す側としての議論は極めて少ない。

そこで本研究は起業家性向を測る EO 理論と、近年注目を集める起業理論の一つ、エフェクチュエーションを援用して在外日本人女性起業家を定性分析から探索、在外日本人女性の起業家精神と在外経験の関係などを解明し、「少産少死」型日本女性起業家支援策に与する新視点の提示を目指す。

この研究関心は以下のような研究経緯から発見された。

筆者は「ビジネス創造性」を主とし、労働者の創造性マネジメント研究、創造と伝統を両立するファミリービジネス (以下 FB) 研究にも取り組む。

在日コリアン FB 企業経営者の創造性を調査したところ、日本人に比べリスク性向も個人創造性も高かった(Yamaguchi, Kang et al., 2012)。これにより「在外経験」が起業家精神に関係しているのではないかとこの研究関心を得た。

同時期、世界規模の起業家調査 GEM(Global Entrepreneurship Monitor)は 2013 年に「移民・外国人起業家は移住先と母国を結び、両国の経済をブーストする」と発表した。同調査によると日本人女性の起業率は世界ワースト 2 位だが成功率は高く、日本人女性の起業は「少産少死」型という特徴があった。更に分析の結果、この「少産少死」という特徴は日本社会の支援の薄さや元々の起業意欲が低いことによるが、高い成功率 (=低廃業率) の理由は不明である (高橋, 2015)。

また筆者は在日外国人起業家研究に取り組む過程で、世界の大都市で起業する日本人女性が想像をはるかに超えて多いことを発見した。

正確な統計データは存在しないが、筆者が調べたところ NY、パリ、ソウルの各都市で数十人~100 人超規模の日本人女性起業家が活躍している。そして現地の日本人会、金融機関などから「個人での起業割合は男女ほぼ同数」「女性起業家の方が成功する傾向」などとの証言を得た。また、在外日本人女性起業の内容を調べたところ手持ち資金で始めて後に変容する自営業スタイルが大半だと分かった。

これら証言に海外で起業するハンディを加味すると、日本国内でよりも海外で日本人女性の起業行動が活発化している可能性も考えられる。また、イノベーティブな製品・業態を携えての起業ではなく、少額の投資で自分ができることでの起業から成長を目指すスタイルは、近年注目される起業理論エフェクチュエーション(Sarasvathy,2001, 2008)の示唆と一致する。

このように、(1)GEM が示した「移民・外国人起業家は移住先と母国を結び、両国の経済をブーストする」(2)同じく GEM による「日本人女性の起業は少産少死」、(3)筆者が発見した「国内より海外で日本人女性の起業行動が活発である可能性」、(4)同じく筆者による「在外日本人女性起業家の起業行動と、エフェクチュエーション理論に一致が多い」という 4 つの発見を端緒にした本研究のリサーチ・クエスチョンは「在外日本人女性起業家の起業プロセスと成功要因は何か」である。この問いを、「母国と移民先の関係」「在外経験」という視点も交えながら探索する。

国内で低調な日本人女性による起業が海外で活発化し、エフェクチュエーション理論と一致するならば、日本人女性の起業支援に必要な要素を同理論が示唆する可能性がある。

また GEM のいう母国・移民先双方への作用を在外日本人女性起業家が果たしているか否かを明らかにすることも、日本人女性の起業が海外で活発化している理由の解明に関連する可能性もある。

2. 研究の目的

経営学において移民起業家は未だ新鮮なトピックであると言えよう。シリコンバレーなど特定地域での海外からの起業家集積(Katz,1991;金井,1994)が知られるが移民の起業プロセスを解くものではない。在外日本人起業家に関する報道は多いが学術研究は少なく、事例研究がほとんどで女性に限ったものは見当たらなかった。

筆者はこれをリサーチの空白域であると考え、在外日本人女性起業家を移民起業家として捉え直して、本研究を計画した。

高橋(2015) は GEM を更に分析、日本人女性起業の低調さに、日本社会の起業に対する否定的態度が影響している可能性を指摘する。「起業に無関心である層が、他者の起業というキャリアを評価するか」を問う指標で、日本は米国の半分の水準である。日本社会では起業を歓迎しない同調圧力があり、逆にこれが少ない海外で日本人女性起業が活発である可能性があると考えられる。

そこで本研究は起業プロセス・成功要因を、(1)本人の起業家性向(EO)・環境、(2)起業に関する

意思決定プロセス、の2点から探索することとする。(1)は Entrepreneurial Orientation (EO) 研究の中から「EO と組織パフォーマンスモデル(Lumpkin and Dess,1996)」を、(2)については「エフェクチュエーション理論(Sarasvathy,2001,2008)」を採用、2理論2種の定性分析を併用する。

起業家性向(EO)研究は Covin and Slevin(1989)が広く用いられるが、これを基に環境要因と業績を加味した、EO と組織パフォーマンスモデル(Lumpkin and Dess,1996)を本研究では用いる。同モデルを基にした半構造化インタビューと GTA 分析により、EO・環境の側面から起業プロセス・成功要因のプロセス図を作成する。

一方のエフェクチュエーション理論は起業家研究分野で近年最も参照される研究論文の一つである (Fisher, 2012)。

同理論において起業家は、事前の市場分析など合理的な行動とそれに基づく意思決定を採らない。

(1)今できることから始め、(2)可能な損失額を把握し、(3)明確な目標より柔軟性を優先し、(4)営業しながらパートナーシップを育て、(5)機会を創造する。こうしたプロセス・特徴は、在外日本人女性起業家に手持ち資金で開業し事業を展開しながら変容を遂げて行く自営業が多いという筆者の発見と大方一致する。

以上2つのアプローチから「在外日本人女性起業家の起業プロセスと成功要因は何か」というリサーチ・クエスチョンを二重に定性研究し、信頼度の高い研究成果となることを目指したものである。

本研究の学術的な特色・独創的な点は、

- (1) 先行研究が不足している在外日本人女性起業家の研究を本格化
 - (2) 海外において日本人女性の起業行動が活発である可能性の検証とその背景の探索
 - (3) エフェクチュエーションの在外日本人女性起業研究への応用というチャレンジ
- という3点である。

3. 研究の方法

2つの定性調査を併用するリサーチ戦略を採る。EO と組織のパフォーマンスモデル、エフェクチュエーションロジックに基づいた半構造化インタビューと GTA によるモデル化である。先行研究が少ないこと、サンプル数の確保が難しく定量調査が困難であることから、異なるロジックに基づいた定性調査を併用することで信頼性・妥当性の高い研究を目指す。

インタビューデータはGTAの手順により分析、プロセス図を作成し、在外日本人女性起業家とエフェクチュエーションの相違と一致を確認する。これらを融合、議論することにより、より具体的に在外日本人女性起業家の起業行動を解明し、必要な支援を探索することを目指した。

研究デザインは以下の通りである。

リサーチ・クエスチョン「在外日本人女性起業家の起業プロセスと成功要因は何か」を、次の4つの命題に発展させた。

- P1 在外日本人女性の起業動機、起業プロセス、成功要因は何か
- P2 在外日本人女性の起業行動に在外経験は影響しているか
- P3 在外日本人女性は起業行動で母国と移民先とどう関わっているか
- P4 在外日本人女性の起業行動とエフェクチュエーション理論はどのような一致・相違点があるか

本研究は2つの定性調査を併用し、これら4つの命題を探索する。

サンプリング戦略は以下のようにした。

本研究においては母集団の特定と、それに基づいた統計的サンプリングが難しい。そこで基本的にはスノーボールサンプリングでインタビューイーと接触、調査を行った。しかし、スノーボールサンプリングにおいても、サンプルの偏りに留意し、産業、教育、社会的階層などの観点から理論的サンプリングとなるよう目指した。

また全サンプルにおいて訪問調査を実施し、基本的に複数回の調査、インタビュー・訪問調査後の追跡調査を実施した。

結果、北米3、インド2、欧州4、南米1、東アジア2の12ケースを調査、分析することとなった。

4. 研究成果

12 ケースのインタビュー、訪問調査、追跡調査などを定性分析、インタビュー内容についてはM-GTAにより分析した。

その結果、「リスク性向が極めて高い」一方、「競争性向は非常に低く」、ファミリービジネス(FB)出身者、女性ゆえに後継者になれなかった者(承継外子女)が極めて多く、起業した後、大半がFBとして発展するという知見を得た。

つまり「在外日本人女性起業家の起業プロセスと成功要因は何か」については、リスク性向の高いビジネスモデルを志向しながら、地域に密着したスタートアップとして競争性向の低いマネジメントを実施、FB化、ローカル企業化を志向することがその答えとなる。

加えて、研究当初の想定外の発見としてマイクロアントレプレナーシップ活動を支援する都市機能の存在も発見した。

研究当初に想定した以上に、在外日本人女性起業家の商業活動が小規模都市にも拡大しており、大都市よりも小規模地域の方が支援が手厚く、子育てや家庭生活にも適しているとして好まれ、起業後は地域に根ざしたFBとして発展、大企業化や上場を目指さず地域経済の発展に寄与しているとの知見を得た。

この発見を端緒に、小規模都市におけるスタートアップ集積を、移民起業家、女性起業家誘致の観点から探索すべく次の研究課題に着手したところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 R.KANG and H.HIGASHIDE	4. 巻 1
2. 論文標題 Exploring Effective Management Style for Creative Workers with Effect Size Analysis	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proc. of The13th International Conference on Knowledge, Information and Creativity Support Systems.	6. 最初と最後の頁 122-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 姜 理恵、東出 浩教	4. 巻 21
2. 論文標題 創造産業従事者の業績を高めるマネジメント	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本創造学会論文誌	6. 最初と最後の頁 76～97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.24578/japancreativity.21.0_76	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 R.KANG and H.HIGASHIDE
2. 発表標題 Exploring Effective Management Style for Creative Workers with Effect Size Analysis
3. 学会等名 The13th International Conference on Knowledge, Information and Creativity Support Systems.（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水里紗 姜理恵
2. 発表標題 女性の起業家精神を育む 経営学教育の実践
3. 学会等名 人工知能学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 王敏達 姜理恵
2. 発表標題 移民と地域活性化
3. 学会等名 人工知能学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川路崇博、姜理恵
2. 発表標題 クリエイティブ経済活動と地域
3. 学会等名 日本創造学会西日本大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 姜理恵
2. 発表標題 在日韓商の起業家特性とE0
3. 学会等名 日本創造学会西日本大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 姜理恵
2. 発表標題 かき氷店経営によるアクティブラーニングと参加学生のクリエイティビティ
3. 学会等名 日本創造学会研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Y. Eno, R. Kang
2. 発表標題 Middle-aged Entrepreneurs and Effectuation Logic
3. 学会等名 The Proceedings of The 14th International Conference on Knowledge, Information and Creativity Support Systems (KICSS 2019)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 H. Kawasakiya, R. Kang
2. 発表標題 Identifying the Characteristics of Startup Cluster in Small Areas
3. 学会等名 The Proceedings of The 14th International Conference on Knowledge, Information and Creativity Support Systems (KICSS 2019)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 R. Shimizu, R. Kang
2. 発表標題 Expansion of entrepreneurship for employees-Consideration from methods of speed of management philosophy in Japanese venture companies with different growth stages
3. 学会等名 JAIST-IISc Seminar
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河崎屋 宏康, 姜 理恵
2. 発表標題 スタートアップ集積都市に関する探索的研究
3. 学会等名 日本創造学会第41回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----